博士学位論文審査要旨

２０１４年1月１５日

論 文 題 目：　1980 年代以降のアジアにおける女性キリスト者の思想形成
　　― タイ北部を事例として ―
学位申請者:　藤原　佐和子
審 査 委 員：
　主　査：　神学研究科　教授　水谷　　誠
　副　査：　神学研究科　教授　三宅　威仁
　副　査：　経済学研究科　教授　上田　曜子

要　　旨：

本論文は、1980 年代以降のタイ北部における代表的女性キリスト者の思想形成についての、我が国における最初の包括的な組織神学的・キリスト教思想史的研究である。

学位申請者の本論文執筆の動機と目的は、我が国と同様にキリスト者が宗教的な少数者に留まっているタイにおいて先駆的な働きをなした女性キリスト者の思想形成過程を掘り起こすことにより、「神学的訓練を受けている女性たち」によるキリスト教共同体内外への貢献可能性について一つの立脚点を示すことにある。

序章では、欧米の女性キリスト者によるフェミニスト神学の形成から「アジアの女性たちの神学」の萌芽までの流れを追うと共に、近接諸領域の研究史や課題を概観することにより、アジアの女性キリスト者たちが「神や人間について語ること」（God-talk）よりも「信仰において神と共に歩み働くこと」（God-walk）を重視している点を指摘する。

第 1 章では、「アジアの女性たちの神学」の制度的基盤であるアジア・キリスト教協議会の女性担当部、第三世界神学者エキュメニカル協会の女性委員会、アジア女性資料センターの成立経過を辿ると共に、1980 年代以降の神学潮流や方法論に言及し、「神学的訓練を受けている女性たち」が直面している現在の課題を浮き彫りにする。

第 2 章では、宣教師主導の時代から 1970 年代にかけてのタイ北部のプロテスタント・キリスト教史を振り返り、宣教師からの正負の遺産、第 2 次世界大戦後の教会復興期の課題、仏教から見たプロテスタンティズムの諸相、女子教育の影響について考察する。

第 3 章では、ガモン・アラヤプラティープを取り上げ、彼女の神学的営為の目標がイエス・キリストへの回心による「真なる人間」の確立にあることを突き止め、その目標がエキュメニズムに直結するものであることを確定する。

第 4 章では、プラカイ・ノンタワシーを論じ、彼女が、実利志向の経済開発や消費文化の台頭によって急変していくタイ社会の諸問題に直面し、諸種の隷属状態からの解放に神の僕として取り組んだ様を描出する。

第 5 章では、ナンタワン・ブーンプラサート‐ルイスに注目し、タイの経済復興や文化的・宗教的信条が女性たちに対する不正義の源泉となっていることをアメリカ合衆国において発信し続けた彼女の神学を論述する。

第 6 章では、チュリーパン・スィーソントーンを取り上げ、タイ北部の文化と宗教性を否定してキリスト者を地域共同体から引き離した宣教師のエヴァンジェリズムに対する批判を展開し、文脈化された牧会のあり方を模索する彼女の活動を紹介する。

終章では、4名の女性神学者の思想を総括すると共に、今後の研究課題として、アジアの他の国々の神学者との比較や、タイの若い世代の女性キリスト者から学ぶ必要性を挙げる。

本論文は、これまで満足な文献目録すらなかったタイ北部における代表的女性キリスト者についての我が国における最初の高度な学術論文であり、彼女たちの思想から我が国のキリスト者が何を学び得、また学ぶべきかについての考察は課題として残されているが、英語文献のみならずタイ語文献も読解して彼女たちの思想を闡明し、さらには18ヶ月に及ぶ実地調査に基づいて彼女たちの思想形成の社会的・文化的文脈を描出した点は高く評価できる。よって、本論文は、博士（神学）（同志社大学）の学位を授与するにふさわしいものであると認められる。

総合試験結果の要旨

２０１４年1月１５日

論 文 題 目：　1980 年代以降のアジアにおける女性キリスト者の思想形成
　　— タイ北部を事例として —
学位申請者:　藤原　佐和子
審 査 委 員：
　主　査：　神学研究科　教授　水谷　　誠
　副　査：　神学研究科　教授　三宅　威仁
　副　査：　経済学研究科　教授　上田　曜子

要　　旨：

藤原佐和子氏は、2010 年 3 月に同志社大学大学院神学研究科博士課程の前期課程を修了し、同年 4 月に後期課程に入学して研究指導を受け、所定の要件を満たすと共に、学位請求論文を提出した。神学研究科委員会は 2014 年 1 月 15 日 10 時より、およそ 2 時間に亘って総合試験を実施し、藤原氏から充分な神学的素養を背景にした的確な応答を受け、また学位請求論文の主題領域について広く深い知識を有していることを確認した。研究に必要な語学力は、博士論文執筆のために英語文献とタイ語文献を広く渉猟して正確に読解していること、また 18 ヶ月に及ぶタイにおける実地調査を成功裡に実施していることにより充分なものと認められる。よって、総合試験の結果は合格であると認める。

博 士 学 位 論 文 要 旨

論 文 題 目： 1980 年代以降のアジアにおける女性キリスト者の思想形成
—タイ北部を事例として—
氏　　名： 藤原　佐和子

要　　旨：

本研究は、1970年代末期に萌芽し、1980年代以降に本格的に展開されている「アジアの女性たちの神学」という枠組みにおいて例外的に学問的蓄積が少ないことが指摘されるタイと日本に注目し、現代のタイにおけるプロテスタント最大合同教派であるタイ・キリスト教団（Church of Christ in Thailand）の神学教育を担うパヤップ大学マクギルバリー神学校（McGilvary College of Divinity, Payap University）にて神学教育に従事した4名の女性神学者の思想形成を事例とする組織神学的、キリスト教思想史的研究である。本研究は、彼女たちの信仰による歩みと働きを掘り起こすことによって思想形成のプロセスを探り、キリスト者が宗教的な少数者に留まっている社会における「神学的訓練を受けている女性」（theologically trained women）のキリスト教共同体の内外に対する貢献可能性についての一つの立脚点を示すことを主たる目的とする。タイの女性神学者に対してより効果的に接近するために、本研究は英語だけでなく現地語（タイ語）、文献研究だけでなくフィールドワークを補足的に用いる。それは本研究がこの神学運動で提唱されている三つの循環的段階という学際的プロセスを「積極的受信」へと展開させることによって、近年、アメリカ在住のアジア系（*Asian*）の女性神学者たちの学問的影響力が圧倒的に優勢となっている現状に抵抗し、この神学運動の出発点であるアジア在住のアジア人（*Asian*）の女性キリスト者に対する視点を回復させようとの意図によるものである。

序章では、欧米の女性キリスト者による思想形成から「アジアの女性たちの神学」の萌芽までの流れや、ジェンダー／セクシュアリティ研究、女性学などの近接領域の研究史とその課題を示し、この神学運動における「神学する」（theologizing）ということが、神や人間の問題について語る（God-talk）ことよりも、個人の信仰に照らして神と共に働く（God-walk）という具体的・能動的参与に主眼を置くものとして理解されていることについて取り上げた。

第1章では、この神学運動の制度的基盤であるアジア・キリスト教協議会（Christian Conference of Asia）の女性担当部、第三世界神学者エキュメニカル協会（Ecumenical Association of the Third World Theologians）の女性委員会、専門誌*In God's Image*を発行するアジア女性資料センター（Asian Women's Resource Centre for Culture and Theology）の成立経緯を辿るとともに、1980年代以降に現れている新しい神学理解、方法論に言及し、「神学的訓練を受けている女性」が直面している現在の課題について考察した。

第2章では、タイの女性神学者の神学思想を検討するための備えとして、宣教の時代から1970年代にかけてのタイ北部のプロテスタント神学の諸相を概観し、戦後の教会復興の時代に遺された課題に対してどのような教会史的、神学的考察がなされたのか、仏教徒の宗教感情から見るプロテスタンティズムはどのようなものであるか、宣教戦略の一つとしての女子教育がタイ北部の女性キリスト者に与えた影響とは何かについて考察した。

第3章では聖書学者として知られるガモン・アラヤプラティープ（Kamol Arayaprateep）の思想形成に注目し、「真なる人間」をめぐる問いがキリスト教の諸教派の一致を目指すエキュメニズムへの確信に結びついていること、それが女性キリスト者の連帯に対する関心にもつながっていることを明らかにした。英語論攷から読み取ることのできる、威厳をもって力強く語る聖書学者というイメージとは対照的に、彼女が神学教育に従事したマクギルバリー神学校やバンコク神学校での聞き取りを通して知ることのできた彼女の姿は、思いやりに溢れた気遣いの人であった。また、イエス・キリストの他に救いに至る道はないと断言していることから明らかに保守的と思われた彼女の神学思想に至っても、聞き取りでは「しばしばリベラルであると批判された」という異なる証言を得ることができた。そして、彼女が「真なる人間」となることを生涯を通して希求するべきものであると考えていたことは自明なものとして理解できたが、彼女が晩年においてもこのような思いを抱き続け、実際に、定年退職を目の前にした会衆に対して尊厳ある高齢者のあり方を説いていたことはタイ語論攷によらずして窺い知ることのできなかった側面である。また、神、キリストに対するアラヤプラティープの絶対的な信頼が、幼くして天涯孤独の身となり、人々に忌避される病に苦しんだ彼女が「祈りと信仰によって癒された」という直接的な回心体験に由来するものであることや、神の栄光と祝福が彼女の豊かな宗教的感受性によって日常のただ中において捉えられていたことを明らかにすることができた。

第4章では、タイの神学教育を牽引し、国際的にも知られるプラカイ・ノンタワシー（Prakai Nontawasee）に注目した。タイにおける神学教育と国際的なエキュメニカル運動の両方に参与したという点ではアラヤプラティープと類似しているが、ノンタワシーにおいてはその関心が国内外のキリスト教共同体だけでなく、力ない人々の不利益を顧みない実利志向の経済開発や消費文化の台頭によって急速に変化していくタイ社会とそれに関係する諸問題や、タイ北部という文脈そのものにまで開かれていることが分かった。また、その思想形成は「物語を聞き取ること」「社会的分析」「神学的考察」という学際的プロセスを早くも実践したものであり、ノンタワシーという女性神学者においても信仰による「語り」と「働き」が決して分かつことのできない密接なものであること、更には、その「働き」が男性キリスト者との共同によって行われるべきであると考えられていたことが明らかになった。

第5章では、タイの女性神学者として最も広く認知されているナンタワン・ブーンプラサート-ルイス（Nantawan Boonprasat-Lewis）に注目し、彼女の思想がノンタワシーと同様にタイの経済的復興が「女性の背中」の上に達成されたものであることに対する批判の眼差しを持つものであることを明らかにした。アジアからアメリカへの越境の経験によってその研究視点をアジアと「アメリカの中のアジア」という二方向に分岐させたルイスが精力的に論攷を発表した1990年代は、アメリカにおいて「アジア系」の神学が興隆し、タイにおいてHIVエイズの蔓延が深刻化した時代と符号している。その意味では、タイの文化的、宗教的信条がいかに女性たちに対する不正義の源泉となっているかという問題をアメリカにおいて語るということは、「アジア系」の中でも層の薄いタイ系のフェミニストとしての彼女の責任感によるものであった。「神学的訓練を受けている女性」としてルイスが懸念していたのは教えること、書くことの権力性の問題である。社会正義（social justice）への強い志向を持つ彼女にとって「神学する」ということは、女性キリスト者としての神学的考察とフェミニストとしての政治的応答という二つの方法を取るものであり、その性格は命を与えるもの（life-giving）、肯定するもの（life-affirming）であるべきであると考えられた。

第6章では、タイ北部の女性キリスト者の現在における代表的存在と言えるチュリーパン・スィーソントーン（Chuleepran Srisoontorn）が、タイ北部の文化と宗教性を否定することによってキリスト者を地域共同体から引き離した宣教師のエヴァンジェリズムに対する痛烈な批判を出発点として、文脈化された牧会と牧会者のあり方についての新しい理解を示していることについて考察した。彼女が神学校の教員として実践神学科目を教えるとともに、小さい教会、貧しい教会、街から遠く離れた農村の教会を積極的に訪ねて地元の人々に溶け込むという行動的な牧会を実践していることを観察できたことは、その働きが、人々と「苦楽をともにする」牧会者のモデルを提唱し、按手を受けた牧師と信徒がともに牧会を担うことによる仕える共同体の形成を目指す彼女の神学思想と疑いなく接合されていることの証左と見ることができた。

本研究は「積極的受信」という実験的なアプローチによって以上の成果を上げることができたが、一方では、キリスト教用語などの独特な表現をはじめとして、アジアの女性キリスト者が母語ではない現地語を媒介として読む、聴くというインプットのむずかしさや、また、研究対象への効果的な接近に役立ったフィールドワークを通して観察することのできた実践的側面をどのように神学論文に取り入れていくかという方法においては課題があることが分かった。しかし、正にそれゆえに、アジアの異なる文脈を生きる女性キリスト者に学び、そこで得られた洞察をキリスト教共同体の内外へとアウトリーチしていくことは「神学的訓練を受けている女性」の引き受けるべき仕事であり、その意味では、「アジアの女性たちの神学」において無前提に肯定されてきた「英語で書く」ということの万能性を疑い、タイ語や日本語といった「母語で書く」ということの意義を再評価することは、神学するということを神学博士や牧師といった宗教的地位の高い者たちの専有物としないことを目指す「神学の民主化」の理念にも適うものと言える。タイの代表的な女性神学者の神学思想からは、宗教的エリートでない一般の信徒も牧師と同じように「神に仕える者」であること、したがって、それぞれの信仰と賜物に基づいて様々な場所で働き続けるべきであるということ、キリスト教共同体において内向化するのではなく神学思想の射程を社会正義にまで展開させていくことによって社会への貢献可能性を探るべきであることといった数々の主張を受け取ることができる。これらには、彼女たち自身の働きによって説得性を増し加えられながら、「神学とは何か」「神学者とは誰か」に対する偏狭な思い込みや既成概念を突破しようとするエネルギーが潜在している。